

看護学系リメディアル・プロジェクトの実践の効果

帝京平成大学現代ライフ学部

仲井克己

千葉県市原市潤井戸 2289

TEL 0436-74-5511

nakai@thu.ac.jp

共同研究者

長尾嘉子 [帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科]

松村紀明 [帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科]

I. 2つの問題点

I - i. 保健・医療・福祉分野の IT 化

「IT 新改革戦略」(IT 戦略本部, 平成 18 年 1 月)において, 重点的に取り組む分野として保健・医療・福祉があげられ, 「重点計画—2006」(平成 18 年 7 月)において IC カードの導入が検討事項とされた。これらを承けて, 厚生労働省は「医療・健康・介護・福祉分野の情報化グランドデザイン」をまとめ IT の促進を具体的に策定した。

しかし, 厚生労働省「総合評価書」(平成 19 年 3 月)によれば, レセプト電算処理システムを実施した医療機関は 19.9% (薬局は 77.4%) に過ぎないという結果が出ている。このような事態が生じる根底には, どのような問題が横たわっているのだろうか?

I - ii. IT 時代における大学生の特性

ゲーム機を利用した mail の交換などを当然と考えるデジタル・ネイティブは, ケータイ電話を必須のアイテムとして暮らしている。しかし, ケータイ電話はひらがな配列のキーボードでありローマ字入力とは異なった感性を必要としているため, 学生の中にはローマ字入力のキーボードに馴染まない学生もいる。

つまり, 現在の学生たちは, 視覚・聴覚などを伴う多彩な情報社会の中で育ってはいるが, 漢字の知識に乏しくローマ字表記 (入力) も苦手という特徴を持っているのである。

加えて, 「ゆとり教育」により「ゆりかご」の中で保護されながら暮らすことに慣れ, そこに安住し, 社会的存在としての自己認識ができない学生もいる。

I - iii. 看護学学科で求められる基礎的な能力

このような状況に対応すべく帝京平成大学看護学科リメディアル・プロジェクトは, 以下の 2 つに目標を絞って IT を活用した教育方法の開発に取り組んだ。

- 1) 看護系教育における必須の知識技術の習得
- 2) コミュニケーション能力の育成

(2)については, OSCE (Objective Structured Clinical Examination ; 客観的臨床能力試験) と直接的に関連している。当然のことではあるが, そこではアルバイトによって獲得される社会性とは決定的に異なった高度なコミュニケーション能力が要求されている。

II. 看護系リメディアル—専門用語の習得—

II - i. 社会へと向かう視線の形成

リメディアル教育を大別すると, 以下の 2 つの考え方がある。

- 1) 高校までの授業の補習
- 2) 専門課程を学ぶ上で必要な基礎知識や技術の確認及びそれらの習得

看護系リメディアル・プロジェクトでは, (2)を重視することになる。

大学の看護系教育における課題の一つとして専門用語の習得がある。一般的には, 市販の用語集などを用いて学ぶことになるが, 漢字を苦手とする学生は難解な専門用語を忌避する傾向が顕著であり, 2 年次以降の学習に障害が生じることがある。

また, たとえ語彙の習得ができたとしても, 外部と遮断された自己内部の学習行為に終始するため, それらの難解な専門用語をわかりやすく表現するための努力を必要と感じていない。

しかし, 現在の看護福祉の世界では, 専門的な知識を持つと同時にわかりやすく表現することが求められようとしている。

ことばを言い換えるためには, 臨機応変に対応するための能力を必要とする。つまり, 学生は社会的な座標軸を認識し, 最も効果的な情報伝達の方法をその場で察知し言語行為として実行する, という能力が求められているのである。

II - ii. 看護系 1000 語征服プロジェクト

では, <ローマ字入力><専門用語の習得><社会的存在としての自覚>などの目標を達成するためにはどのような方法があるのだろうか?

試みのひとつとして, Excel で作成したデータベースを活用し, 10 分間 100 語, 合計 1000 語の入力演習を行った。6 秒で 1 語の作業は, 学生にとってストレスの少ない打ち込み速度である。

<http://edu-project.com/tu/kango.htm>

(F9 を押すことにより乱数表に基づく新しい問題 10 間が表示され, 知識の確認ができる)

学生の約 65% (聞き取り調査) がこの作業に関して「効果がある」「評価できる」と回答した。

Ⅲ. ネットワークという発想に基づく教育

—看護福祉系学生によるCATVコンテンツの制作—

Ⅲ-i. [参加-共創]による意識革命

Excelによる看護系専門用語の確認が学生に受け入れられた主な理由は以下のとおりである。

- 1) ゲーム感覚で学ぶことができる。
- 2) 10分間10回の努力でかなりの達成感が得られる。
- 3) [データベース作成]に参加しているという共創の感覚があらたなモチベーションとなる。

このExcelシートの特性は、[不要・誤り・語彙の選択]などについて、自らが主体的に参画しさらに良いものへと改変し、それを公開していくことができるという点にある。(3)は、そのことについての評価である。

Ⅲ-ii. 事例：看護学科CATVコンテンツの制作

帝京平成大学看護学科長尾嘉子准教授を中心に、「新型インフルエンザの予防—手洗いとうがい—」のDVDを作成し、ちはら台CATV〔〔財〕首都圏ケーブルメディア、市原市教育委員会〕で6月から一週間にわたって放映するとともに、学内およびグループ校を中心に公開をはじめた。

[コンテンツの撮影及び出演—編集—公開]という情報発信を看護学科に所属する教員と学生が主体的に推進することで、学生は学科自体が社会的責任を担っていることをあらためて認識し、そこで学ぶ自分たちもまた社会に対して重要な役割を果たすべき存在であることを体験的に学ぶことができる。

今後のCATVコンテンツ制作については、学生の参加を前提に「アトピー性皮膚炎」「結核」「麻薬」「タバコ」などを予定している。

Ⅲ-iii. 事例[地域医療学部理学療法学科]

—身体を管理する親子の絆—

理学療法学科長尾邦彦教授を中心に、[地域で支える健康]をキーワードに、子供に対する施術を親に指導するCATVコンテンツ(30分番組5本)を制作した。その際、ビデオ撮影は、理学療法学科の学生が中心になって行われた。



この撮影を通して、「わかってもらえる説明」「理解するために必要な画像」などについて、学生たちはCATV撮影という現場で考えを深めることができた。

Ⅳ. コミュニティの形成

Ⅳ-i. 専門的な知識と社会性の両立

「病院の言葉」が変わりつつある(国立国語研究所「病院の言葉」委員会2008年10月)。

実際、「頓服」「誤嚥」「栓塞」「狭窄」などは耳で聞いただけでは理解できないであろう。「食間」の誤解も依然根強い。1800万人に及ぶとされる糖尿病において重要な指標になる「HbA1c」に至っては、一般の理解を超えている。

このような難解な言葉を回避し、患者に分かる表現を可能にするためには、専門用語の習得と共に一般の人々の立場から考察できる感性が求められる。OSCEが必要とされる根本的な理由が、ここにある。

Ⅳ-ii. 連携する組織

ITを活用したリメディアル・プロジェクトは、必然的に看護学科・理学療法学科・人間文化学科など関連学科の協力体制を築く必要に迫られる。このようなコミュニティ形成の体験が、自己の内側へと向かう視線を外界へと転ずる機会になる。

しかし、リメディアル教育にITを導入する最大のメリットは、さらにその外側にある<(見えざる)他者>を意識することができるという点にある。この方向性は、従来の看護福祉系学科の教育では、「実習」がその役割を担っていた。しかし、実習時にコミュニケーション能力をも身につけるといえるのは実際には不可能であった。OSCEの導入は、その意味でも時宜に見合ったものといえる。

Ⅳ-iii. 予想あるいは期待される今後の展開

本報告で取りあげた看護系専門用語に関するExcelシートの作成は、コンピュータ演習基礎コースの授業内容である。乱数の導入も一般の関数と違いはない。また、DVD制作に関する基本的な技術も、Premiereやfinal Cutなどが普及した現在にあって、難易度は高いとはいえないであろう。

これからの数年という期間で考えるならば、出版社などと平行する形で研究室主体のグループや学生個人などが制作した優れた教育用コンテンツが世に出てくる可能性がある。それらをフェアに評価し、大学教育の活性化にどのように資するかが問われようとしている。多様性に富んだ集团的知性をどのように活用し評価していくのか、クラウド・ソーシングという面からも今後の課題である。

本報告における一連の研究について、以下の諸組織と連携した。

- ・ネットワークを利用した授業の展開：佐藤博樹 [セーバー代表] (<http://www.rizardon.com>)
- ・IT教育に関する問題点の把握：FOREST JAPAN (<http://www.forestjapan.com>)